

はじめに

日本語が古代語から近代語へと大きく転換して行く中世、その後期に当たる室町時代になると、狂言やキリシタン資料があつて、当時の話し言葉を生き生きととらえている。その言葉は、現代の我々のそれ、厳密に言えば西部方言系のそれにかなり近づいている。次の文章は、狂言「雷」の一幕で、雲間を踏み外して腰を打った雷が通りかかった医師に鍼を打ってもらふところである。

(雷) 身共は今まで脈をとられ事がなひが、面白ひ所に脈が有な。(医師) 中々人間は手にござる。雷 殿のはかしらにござると聞きまらした。(雷) それほど知つて、最前知らぬと云たな。(医師) 事の外度種がござる。(雷) さうであらうず。最前は目が舞ふたが、かしらも打つた。(医師) さやうに御ざらう。腰の痛み斗でなふて、中風氣に御ざる。(雷) 今までさやうの事は知らなんだ。急いで直せ。(医師) 私は第一針が上手でござる。立て直ひて進ぜう。ずう。(雷) あ痛やく。やれゝいかふ痛ひは。(医師) 総別針は痛みもので御ざる。堪へさせられひ。(虎明本狂言)

現代語ならば「ございます」「ます」と言うところを「ござる」「まらす」と言っている。また頭のことを「かしら」と言うなど小さな違いは少なくない。もつとも、頭を表す語は室町時代には「あたま」になっており、現代でも「尾頭付きの鯛」と言うように動物の場合には「かしら」が残つて

はじめに 3

一 研究のはじまり

大矢透氏の注目12／新村出氏の研究14／新村氏旧蔵の抄物16／湯沢幸吉郎氏の研究18

二 聞書者の言葉

口語体で書かれている抄物20／なぜ口語体なのか21／清原宣賢の手控と林宗二の聞書25／
手控の言葉と聞書の言葉27／聞書者による整備32／講席における聞書33／月舟寿桂の抄物
37／林宗二・宗和の抄物38

三 講者の言葉

清原宣賢のゾ体の抄物42／「ゾ」47／『史記抄』の聞書と抄52／『史記抄』における聞書
の言葉と抄の言葉55

四 抄物文体の発生と深化

仮名交じり口語体抄の出現60／ゾ体の定着66／清原家の抄物のはじまり70／先行説の継承
71／口頭による先行説の継承72／講義と解釈の深化75／彦龍周興の講義80／自立性の獲得
85／絵入り読み物化86／抄物の衰退92

五 原典の広がり

原典から見た抄物の広がり94／論語の抄物101／地方僧系とされる『論語抄』106／希頊周顥
講『論語講義筆記』111

六 書き入れ仮名抄

五山版『虚堂和尚語録』への書き入れ114／禪語資料として119／ヲコト点123／五山版への書
き入れ仮名注124／書き入れ仮名抄の広がり126

七 特定の原典を持たぬ一種の抄物

「きわだやたのみなるらん」130／私が模索していた方向131／きわだとその効能133／詞章変
容から見た虎明本135／「雷」のくすし139／なぜきわだなのか141／特定の原典を持たぬ一種

の抄物―医学・本草類142／特定の原典を持たぬ一種の抄物の広がり145／詩文類146／辞書・事彙類149／宗義類152／神道類156／その他158／ゾ体口語文体の限界164

八 古活字版と整版

古活字版から整版へ166／『和名集^并異名製剤記』の諸版166／美濃判本から横本へ169／古活字版と付訓170／整版の付訓171／片仮名交じり体から平仮名交じり体へ176

九 発掘と整備

望まれる発掘と整備178／『洗心経』178／明版断易書183／明版を踏まえた著作185／足利学校における著作186／『周易』を「洗心経」と呼ぶこと187／「歓楽」188／『(易占書)』192／東京大学国語研究室蔵『蒙求抄』193／講者195／抄物の発掘と整備を200

おわりに
202

あとがき
204